

屋久島研究講座（屋久島環境文化村センター）

# 発掘された屋久島

～ 安房城 ～

屋久島町教育委員会社会教育課

濱岡 尚志

# はじめに

## 本日の内容

- I 屋久島の遺跡・歴史
- II 安房城の概要
- III 発掘調査の方法
- IV 発掘調査の成果
- V まとめ

# ○ 考古学とは

考古学とは、土の中あるいは水の中に残された人々の生活の痕跡から生活・文化を復元し、人類について考える学問である。

人類が出現してから現代にいたるまでの  
期間を対象とする。



# I 屋久島の遺跡・歴史

- ・ 屋久島の遺跡
- ・ 中世の屋久島



## (1) 屋久島の遺跡 ①遺跡

- 遺跡とは、「**過去の人類の活動の痕跡が残っている場所**」  
(住居跡, 貝塚, 城跡など)
- 屋久島町内には, 90を超える遺跡があり, そのほとんどが沿岸部の集落や道路の地面下に存在している。
- **遺構**と**遺物**で構成されている。



左 竪穴式住居跡 (復元)

(屋久横峯遺跡)

右 山城遠景

(楠川城跡)

## (1) 屋久島の遺跡 ②遺構

- ・ 遺構とは、人間活動によって地面に掘り込まれた痕跡（住居跡、溝など）

→不動産

- ・ 考古学の発掘調査では、掘り込みを面的に検出するため、可能な限り水平に掘り下げていくことが求められる。



左 竪穴式住居跡  
(屋久横峯遺跡)

右 空堀と石積  
(楠川城跡)

## (1) 屋久島の遺跡 ③遺物

- 土器や石器など，人間によって形成された道具や，自然物を加工したもの

→動産

- その特徴から使用年代を推察することで，発見された地層，遺跡の時代を考察する材料となる。



出土状況（湯向集落遺跡）



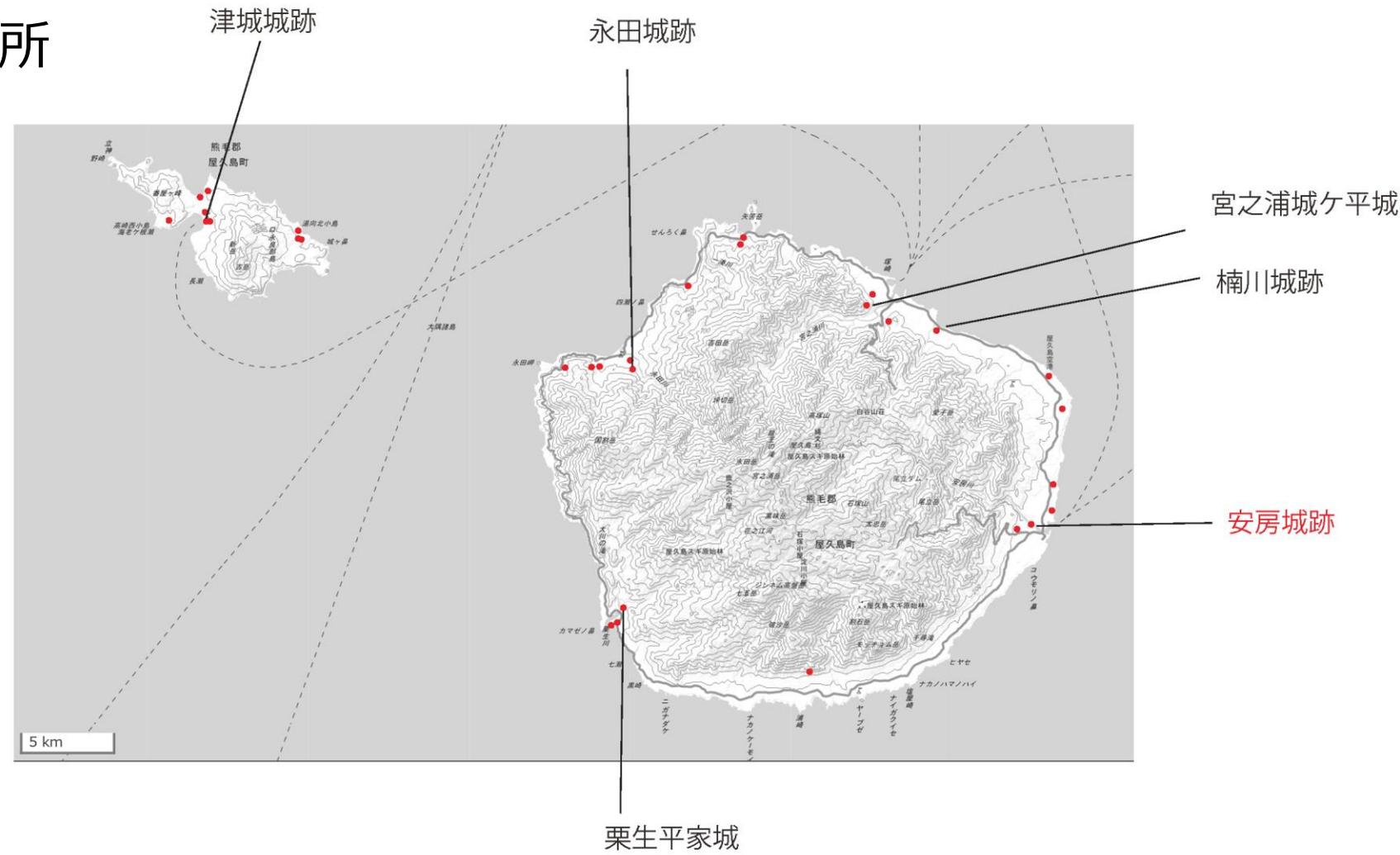
保管状況（安房城跡）



展示状況（屋久横峯遺跡）

## (2) 中世の屋久島

- 町内の中世遺跡は**31**カ所
- 山城跡は**14**カ所
- 山城で発掘調査が行われたのは  
**安房城跡, 楠川城跡のみ**
- 比較的大きな河川や、  
湾地形を有する沿岸部に  
集中する傾向がある。



## (2) 中世の屋久島

- 1185年 壇ノ浦の戦いにより平氏一門が滅亡し、南島にも残党が逃れた可能性  
空白（13世紀～14世紀）
- 1408年 守護島津元久が種子島氏に屋久島，口永良部島を与えられる。
- 1524年 種子島氏，楠川・吉田に築城
- 1543年 種子島氏，禰寝氏（大隅）に攻められ，屋久島を割譲
- 1544年 種子島氏，屋久島で合戦を経て同島を奪還する。
- 1566年 禰寝氏，一湊・口永良部島を攻撃
- 1573年 禰寝氏，島津氏に下る。

## Ⅱ 安房城の概要

(1) 山城について

(2) 安房城について



## (1) 山城について ①近世城郭

織田信長が築いた安土城以降、江戸時代にかけて築かれるようになったのが近世城郭

- ・ 「石」の城
- ・ 高い石垣や瓦を葺いた屋根，天守閣を搭載した礎石建築物。広大な堀。
- ・ 政治的な拠点（殿様の住居）
- ・ 一国一城制度により総数は少ない。



# (1) 山城について ②中世城郭

- 「**土**」の城
- 自然の山を削ったり掘ったり盛ったりしてできている。いわゆる「山城」
- 常時はふもとの平地に住み，戦時のみ使用。
- ほとんどが南北朝時代～戦国時代に築城
- 日本の城のほとんどはこの中世城郭にあたる。



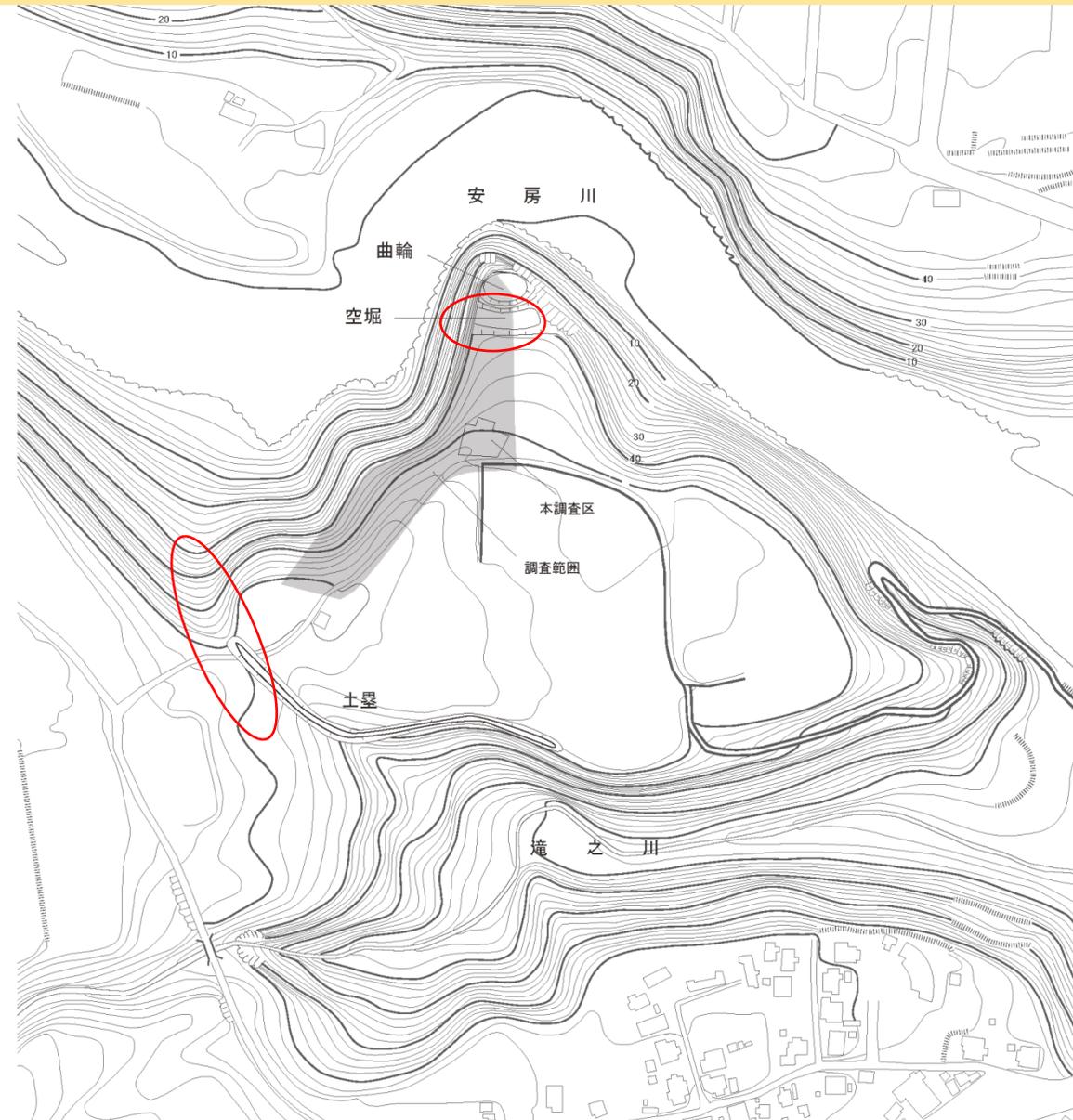
## (2) 安房城について ①位置

- 屋久島南東部の安房（春牧集落）に位置する（健康の森公園の東側）
- 安房は人口も集中しており，高速船も就航する屋久島南部の経済的中心地
- 蛇行する安房川に張り出した地形を呈し北・東が安房川，南が滝之川に接する崖に囲まれている



## (2) 安房城について ②地形

- ・ 標高およそ50m
- ・ 東西約500m, 南北約300m
- ・ 西側には**土塁**  
(土を盛って作った壁)
- ・ 北側には**空堀**  
(地面を溝状に削ったもの)
- ・ 現在は雑木林であるが, 畑作の跡も
- ・ 東側にはホテルの残骸
- ・ 北側先端部には「はねつるべ」の伝承  
(安房川の水をくみ上げる施設)



# Ⅲ 発掘調査の方法

- (1) 調査の経緯
- (2) 確認調査
- (3) 記録保存調査



## (1) 調査の経緯

- 平成26年7月 地権者から開発に伴う遺跡照会があり、周知の埋蔵文化財包蔵地「安房城跡」であることを確認
- 平成26年10月 当該地の踏査により山城としての遺構を確認、さらには試掘トレンチ調査（0.5m×0.5m程度を2カ所）を行ったところ、陶磁器片が出土した。  
→遺跡の範囲をはじめとした詳細な調査が必要となった。



# (1) 調査の経緯

- 令和元年 **確認調査**（遺跡の性格・規模等を確認するための調査）を実施  
→この調査によって当該地が明確に遺跡であることを確認した。法律によって遺跡に影響を及ぼす開発行為を行う際には、何らかの保護施策をとらなければならない。  
（例 遺跡を避けて開発，盛土をしてその上で開発，記録保存調査）
- 令和2年 **記録保存調査**（開発行為によって破壊される遺跡の，記録を残すための調査）を実施



## (2) 確認調査(令和元年度)

- ・ トレンチ調査(13カ所)を実施  
→**範囲を決めて遺跡の広がり, 層序を確認するための調査**
- ・ 出土した遺物は位置を記録するためタワー状にして残す。
- ・ 中世の遺構, 遺物を検出することを目的とし**アカホヤ層**上面まで掘り下げ。



トレンチ1 調査前

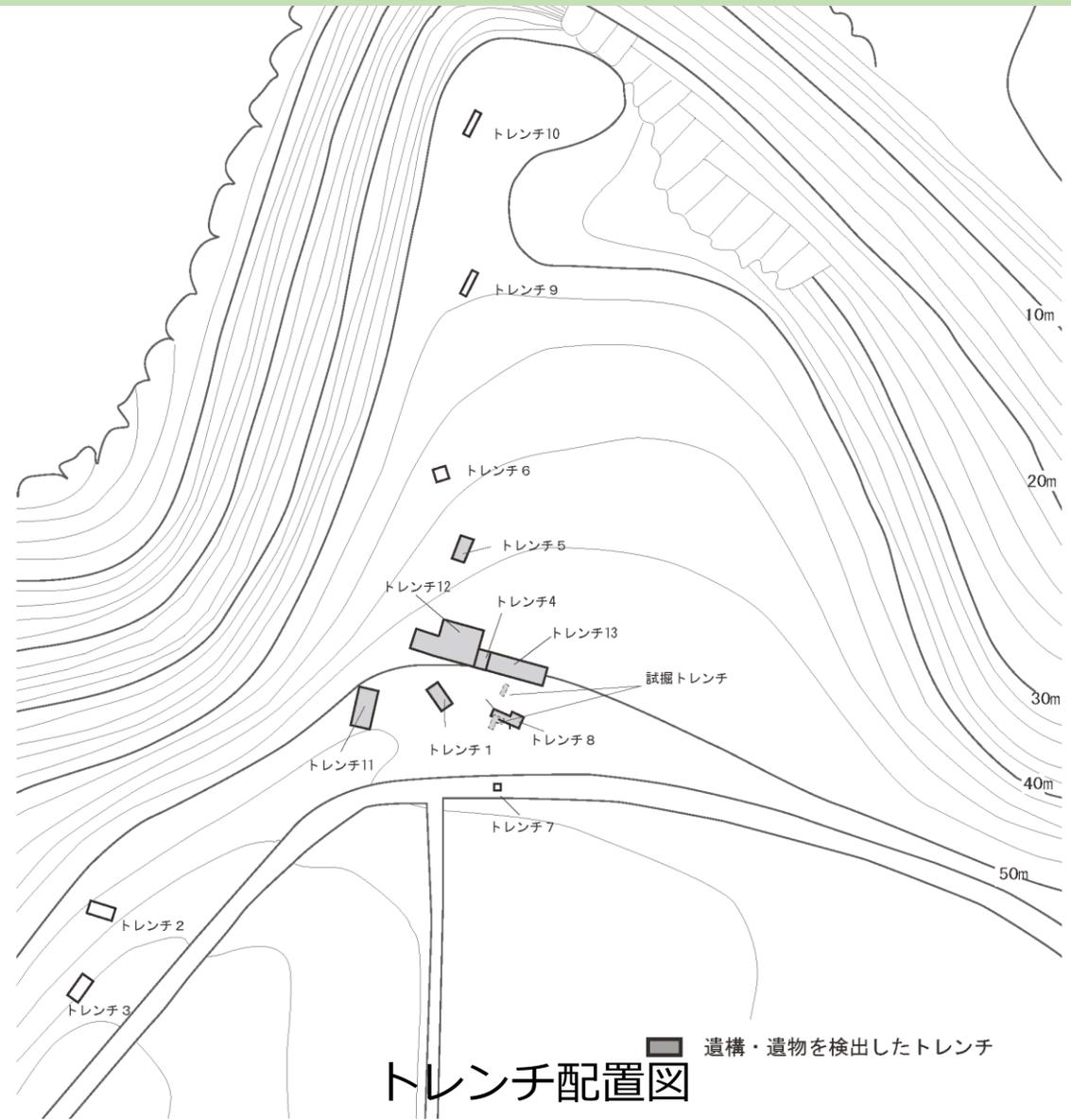


トレンチ1 遺物出土状況



トレンチ1 アカホヤ層検出状況

# (2) 確認調査(令和元年度)







# (3) 記録保存調査(令和2年度)



調査区配置図

### (3) 記録保存調査(令和2年度)

- ・ 開発予定地内であり, 確認調査で判明した遺物の残る場所の全面を掘削
- ・ 掘削予定地を1~6の調査区(10m×10mを基準)に区分け
- ・ 遺物はI層(表土)は一括で取り上げ, II層(黒色包含層)は位置を記録
- ・ 掘削面積はおよそ400m<sup>2</sup>



調査前



調査状況



完掘状況

# IV 発掘調査の成果

- (1) 層序について
- (2) 遺構について
- (3) 遺物について



# (1) 層序について

層位表

層位	時代	色調	備考	層厚
I	現代	黒褐色	表土	5～10cm
II	中世・近世	黒色	遺物包含層	5～20cm
III	a	—	明褐色	120cm (推定)
	b	—	橙色	
	c	—	黄橙色 小石が混ざる	
IV	—	灰白色	粘土質	—

- ・ 人類が生活すると土は黒色に!!
- ・ III層は幸屋火砕流（7,300円前）由来の火山灰層



## (2) 遺構について



## (2) 遺構について

- アカホヤ層が掘り込まれており，その直上のⅡ層黒色層が堆積しているもの。

→中世の包含層である黒色土が堆積しているということは，当時掘り込まれたものであると考えられるため。

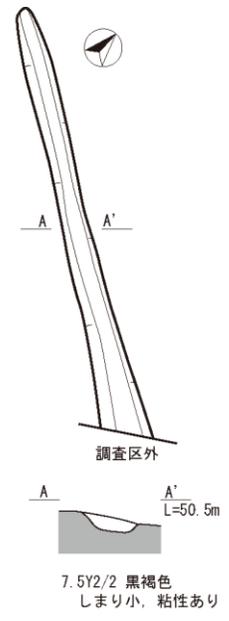
- アカホヤ層上面で検出し，半裁・土層確認用のベルトを残しながら掘削した。
- 溝状遺構 5 基，ピット 3 基，土坑 1 基を検出



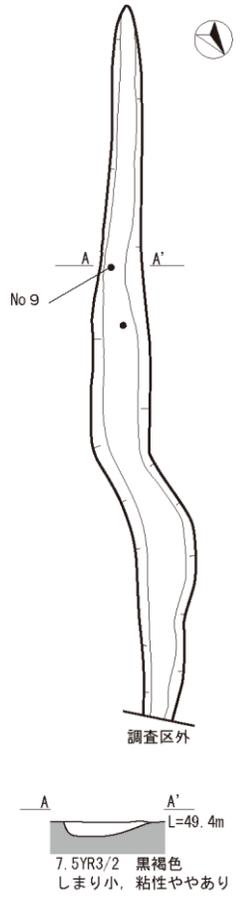
遺構配置図

# (2) 遺構について(溝状遺構)

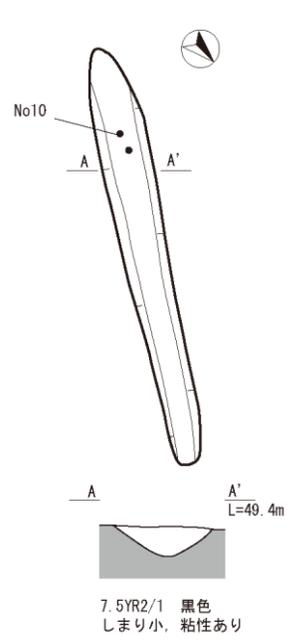
溝状遺構 1



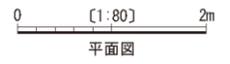
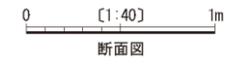
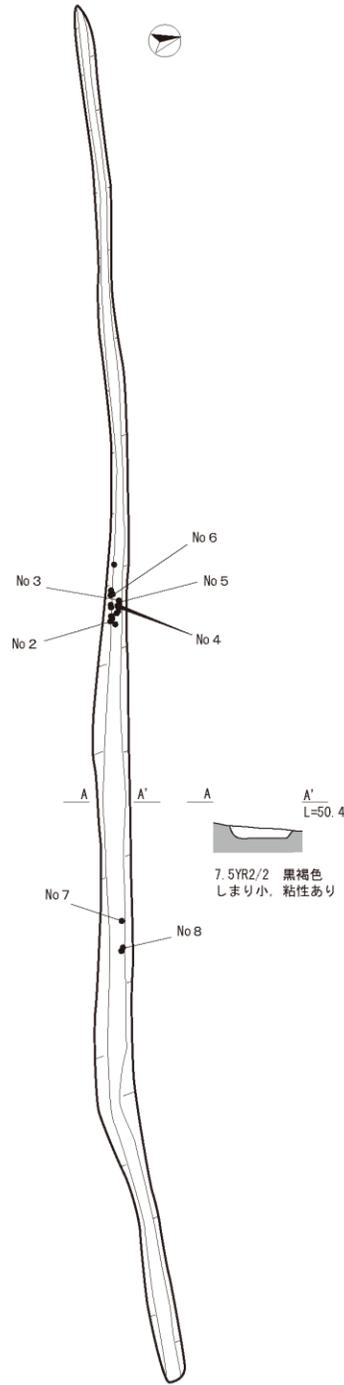
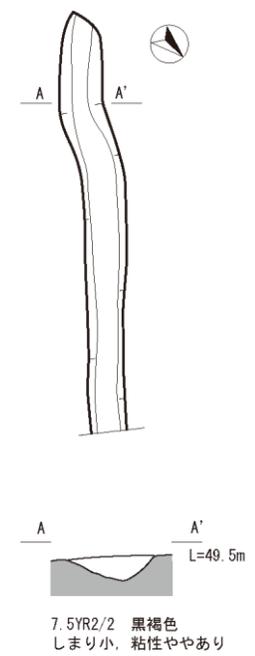
溝状遺構 3



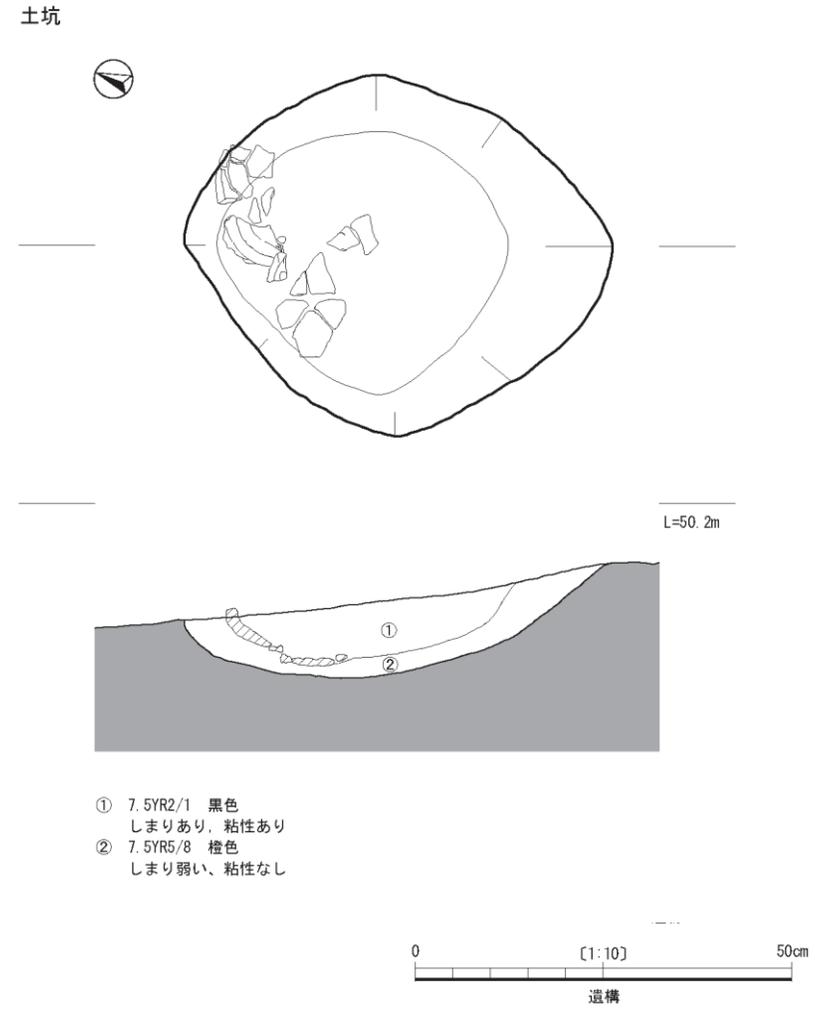
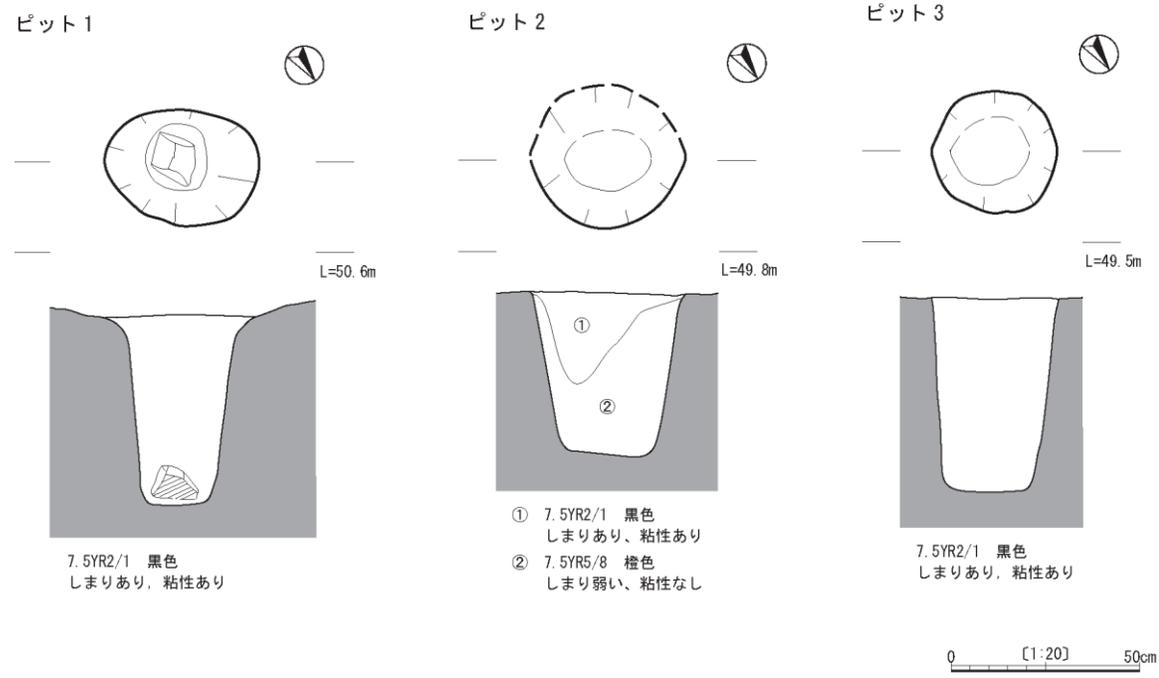
溝状遺構 4



溝状遺構 5



# (2) 遺構について(ピット・土坑)



- ピット1の底には石
- 土坑からは土師器片がまとまって出土

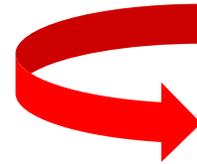
### (3) 遺物について



出土遺物

### (3) 遺物について ①土師器(かわらけ)

- 土師質土器碗で，土坑内からまとまって出土
- 古墳時代～近世に作られていた素焼きの土器  
うち中世のものを「かわらけ」とよぶことがある。
- 用途については諸説あり，日常生活での食器  
として，あるいは儀式等。
- 安房城では出土数が少ない。

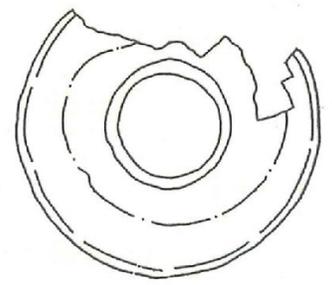
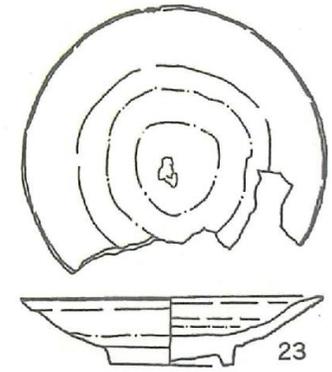
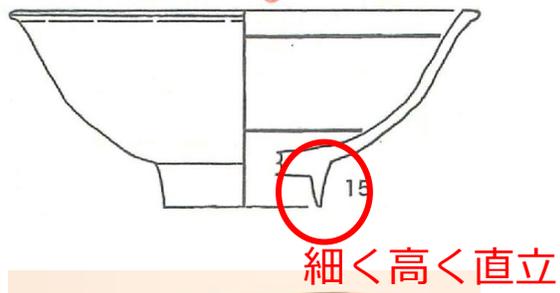
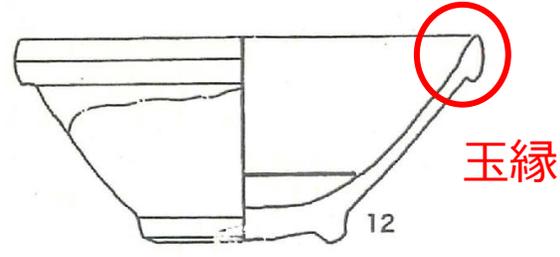


復元

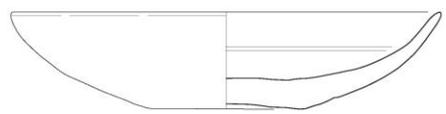
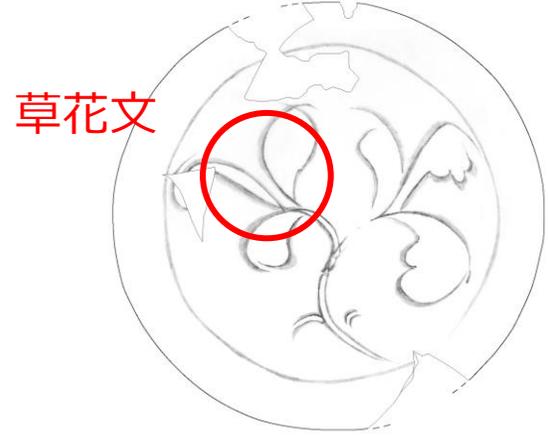


### (3) 遺物について ②輸入陶磁器(白磁)

- 磁器のうち透明の釉薬を塗ったもの。
- 椀, 皿がほとんどであり, その他壺・水注がわずかに出土した。
- 中国北部の定窯で生産されていたものであると考えられる。
- 形状から12世紀後半～13世紀の時代幅

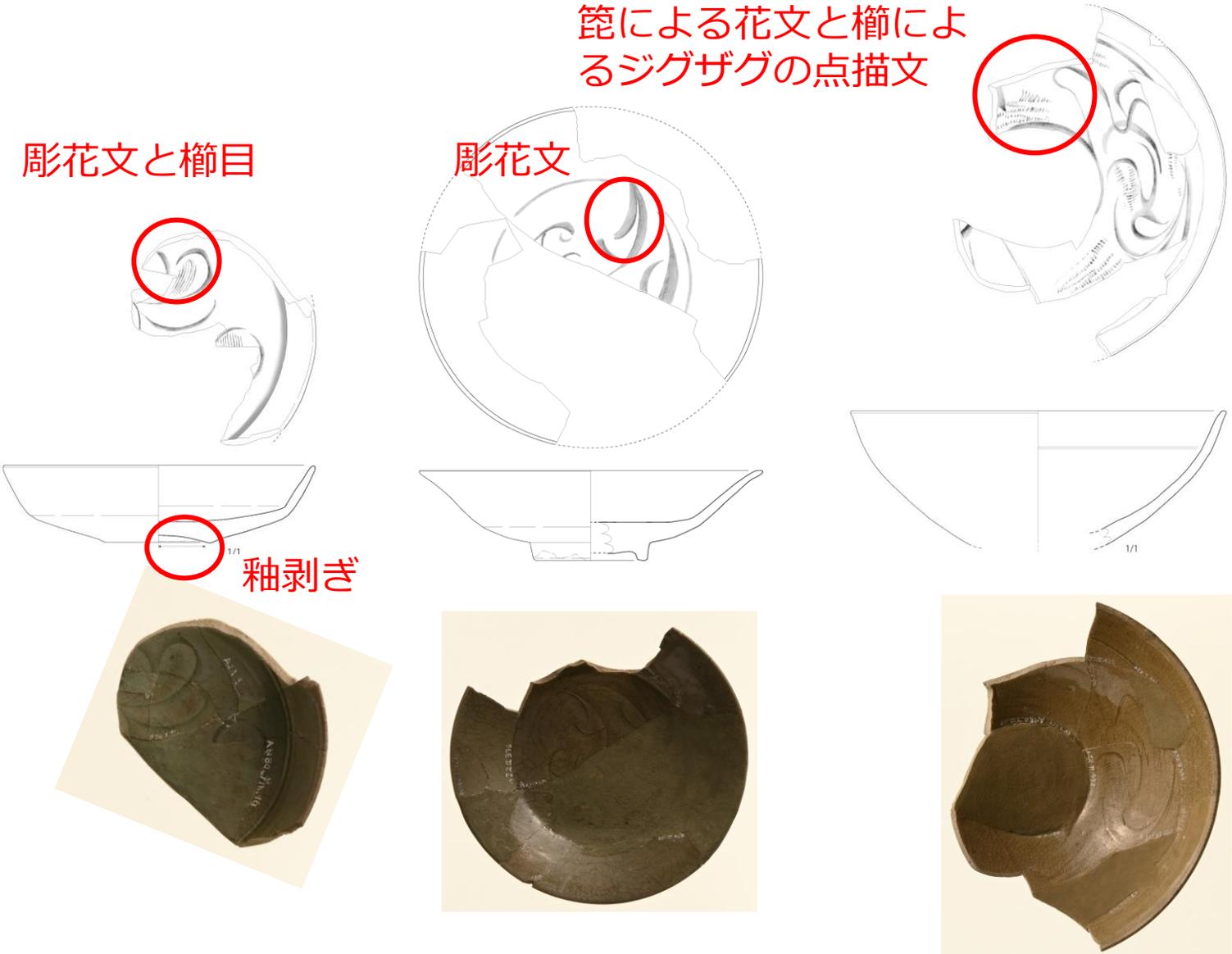


釉剥ぎ



### (3) 遺物について ③輸入陶磁器(青磁)

- 磁器のうち、焼くと青緑色になる釉薬を塗ったもの
- 左から皿、浅形碗、碗
- 碗は同安窯系、皿・は龍泉窯系でいずれも中国(宋)の福建省・浙江省などで作られていたもの
- 12世紀後半～13世紀の時代幅



### (3) 遺物について ④輸入陶磁器(陶器)

- ・ 甕, 壺, 鉢などが出土
- ・ 12世紀~13世紀に時代幅を持つものが多い。
- ・ 出土点数は白磁に次いで多いが, 甕や壺など比較的大型のものが多く個体数は少なめか。
- ・ 大型の瓶などは, 磁器の椀や皿を運ぶコンテナとしての役割を担っていたとも言われている。

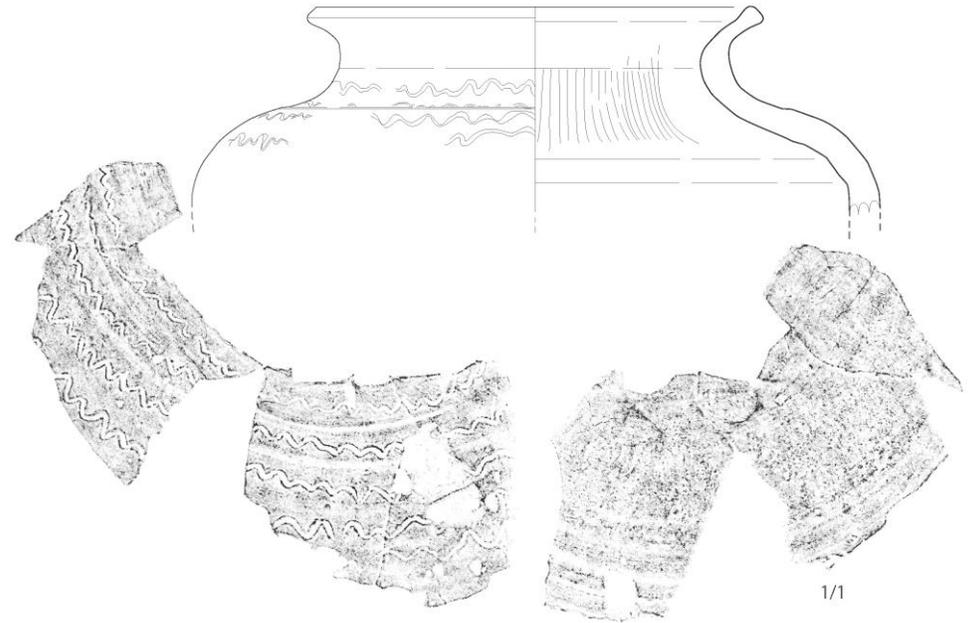


### (3) 遺物について ⑤国産須恵器

- 「カムイヤキ」という類須恵器の土器であり，徳之島南部（現在の伊仙町）で11世紀～14世紀の間生産されていた。

→「須恵器」とは，野焼きであったこれまでの土器とは違い窯で焼くようになった土器のこと。古墳時代以降，国内各地で作られるようになる。

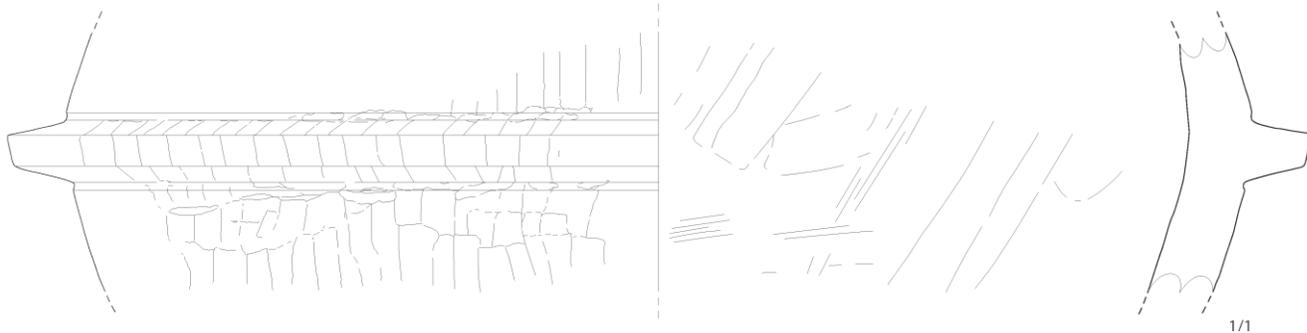
- 窯跡が出土した地区「亀焼」を（カムイヤキ）と称することが由来
- 焼き上がりの色調や波状沈線文やタタキ痕などの特徴が朝鮮半島の無釉陶器にも似ている。
- その他，国産須恵器として東播磨系須恵器の片口鉢が数点出土している。



### (3) 遺物について ⑥石製品

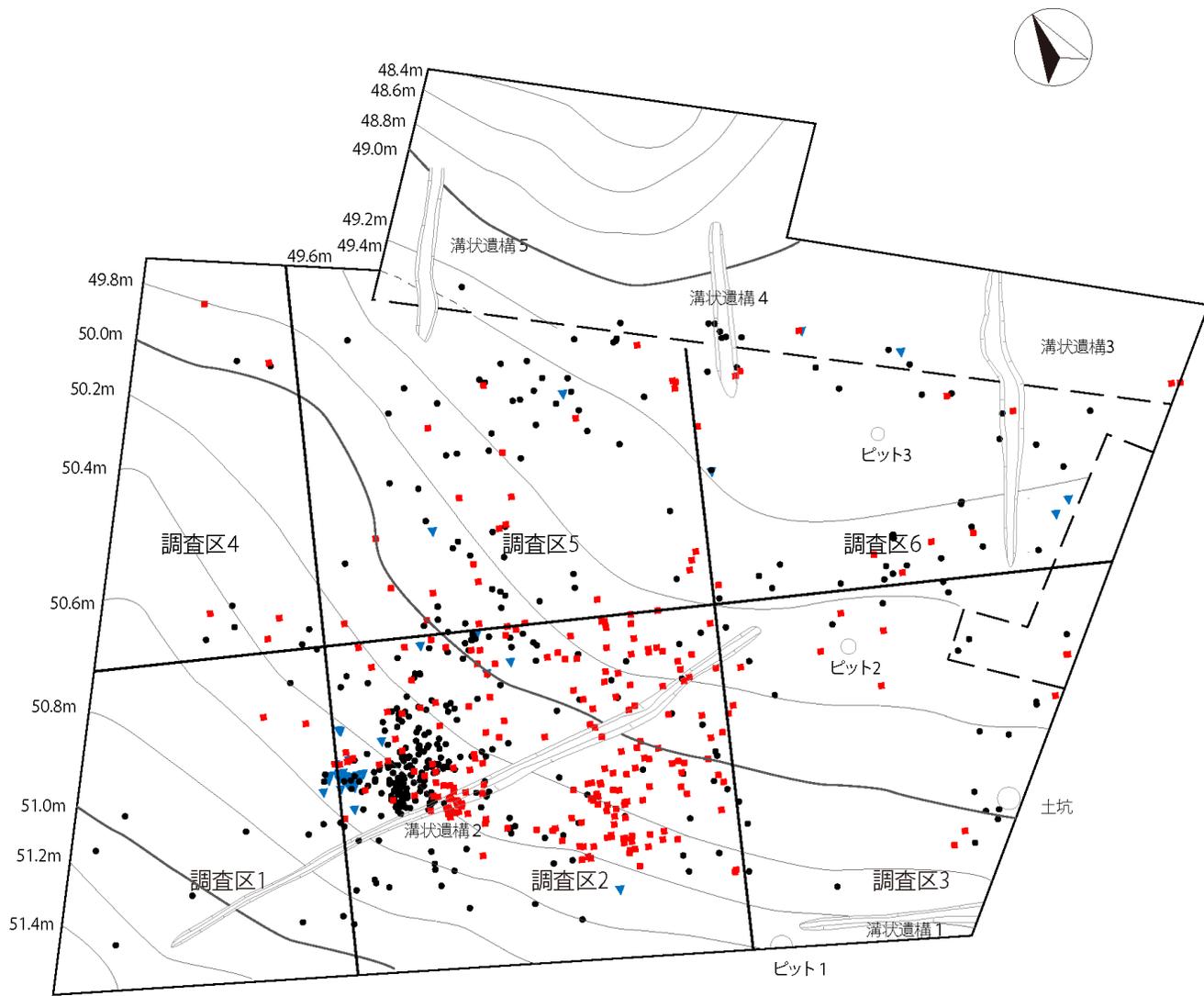
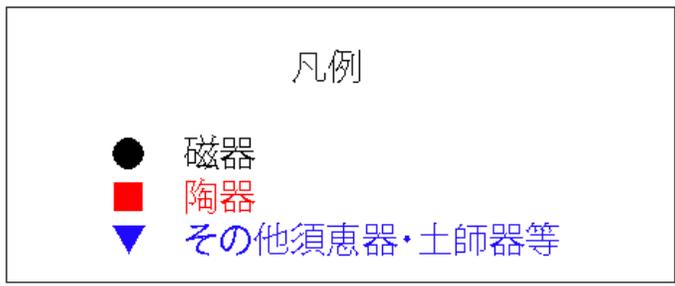
- ・ 滑石製の石鍋
- ・ 現在の長崎県西彼杵半島にある鉱床にて採れた滑石をくり抜いて製作
- ・ 柔らかいため加工しやすく，保温性が高い。
- ・ 10世紀末から作られはじめ，14世紀ごろに最盛期，16世紀には消滅
- ・ 把手の形状から，安房城のものは12世紀代と思われる。

→中国産磁器（玉縁口縁），カムイヤキ，滑石製石鍋の組み合わせは南島のグスク遺跡でもよく見られる



# (3) 遺物について

- I層出土分は除く。  
調査区ごとに一括で取り上げ。
- 調査地 2, 5 はII層の遺物包含層が比較的厚く堆積しており, 遺物量も多い。
- 規則性を見出すことは難しい。

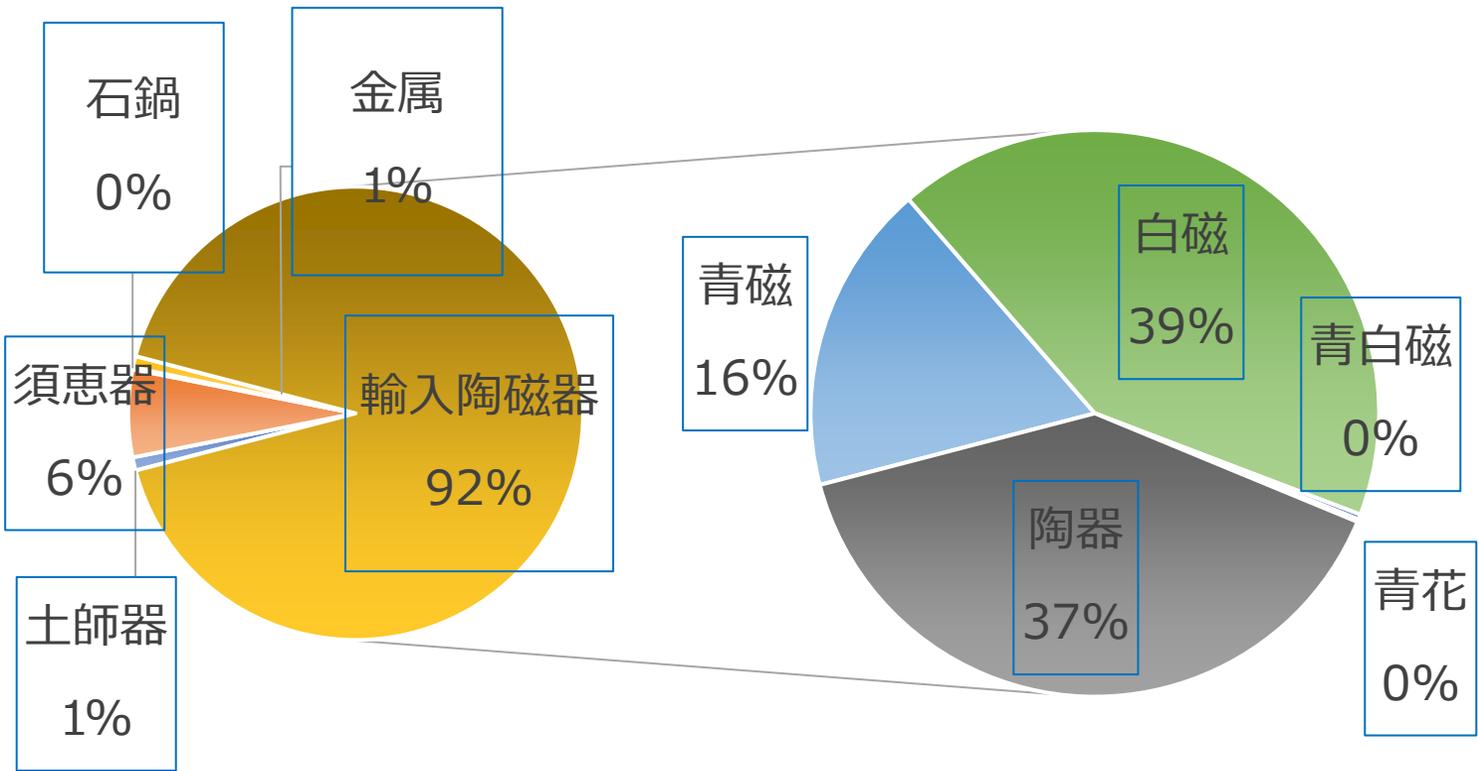


### (3) 遺物について 出土遺物表(Ⅱ層)

種類	点数
土師器	7
<b>輸入陶磁器</b>	<b>678</b>
須恵器	46
石鍋	1
鉄製品	6
<b>合計</b>	<b>738</b>

種類	点数
青磁	120
白磁	286
青白磁	2
青花	1
陶器	269
<b>合計</b>	<b>678</b>

- ・ 輸入陶磁器が最も多く、次いで須恵器，土師器
- ・ 輸入陶磁器の内訳は，白磁，陶器，青磁の順
- ・ その他トレンチ出土分，Ⅰ層及び表採品があるため出土量はこの2倍程度か



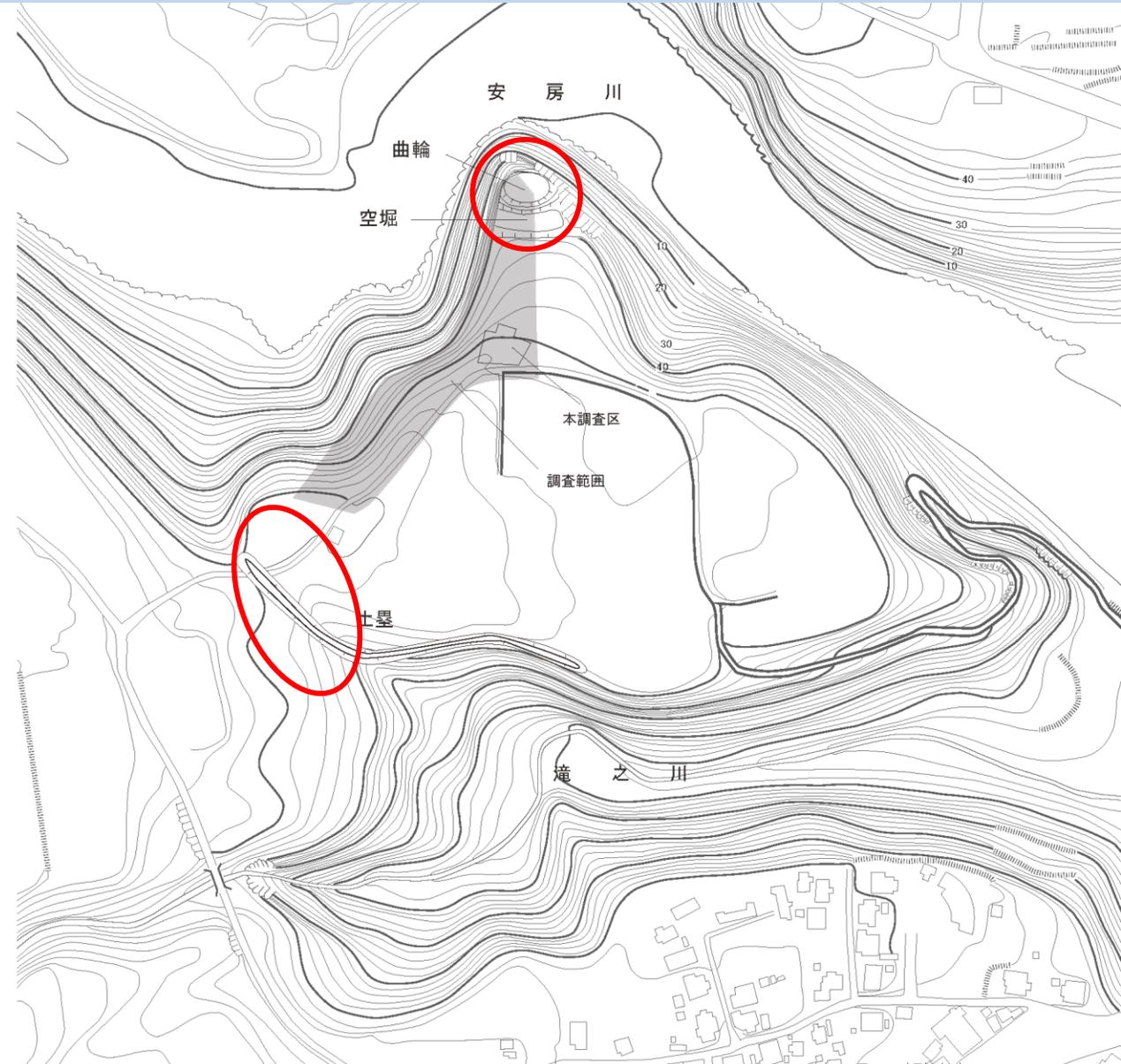
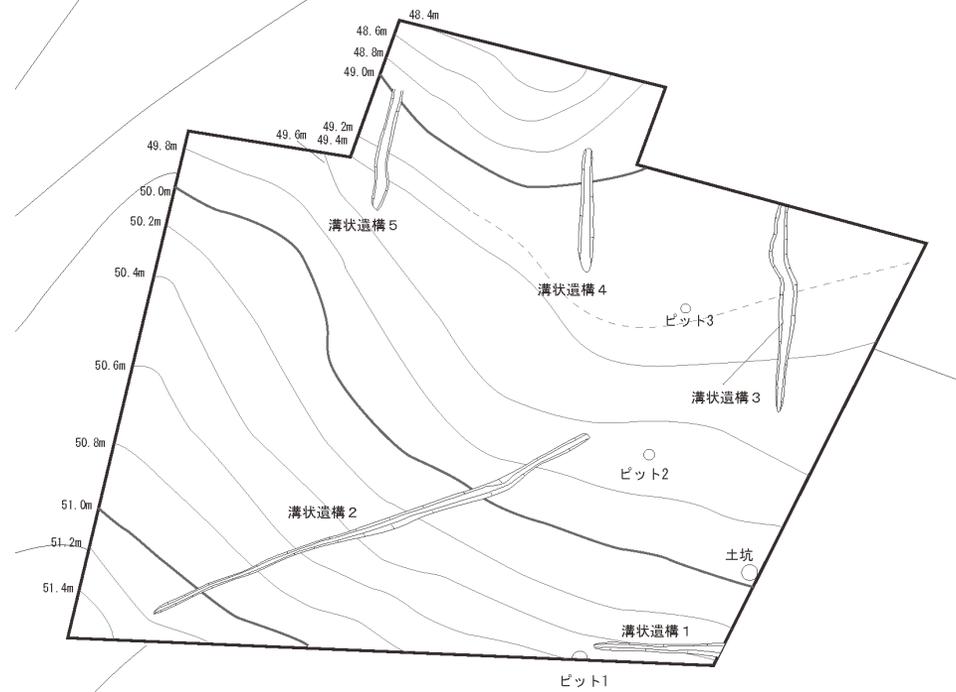
# V まとめ

- (1) 遺構
- (2) 遺物
- (3) 安房城跡について



# (1) 遺構

- 西側の丘陵地の玄関口部分の土塁
- 北側先端部の曲輪と空堀
- 土坑1基, ピット3基, 溝状遺構5基  
(土坑内からは土師器片がまとまって出土)



## (2) 遺物

- 輸入陶磁器が全体の9割でその他須恵器，土師器，石製品，鉄製品等が出土した。
- 陶磁器については「大宰府条坊跡XV」を参考に分類したところほとんどが12世紀後半～13世紀初頭（50年程度の時代幅）であった。ほかの国産品もおおむねこの時期に当てはまる。
- 同時期の遺跡と比較すると，土師器の出土が少ないという傾向
- 形が歪であるもの，欠損，焼成が不調なものなど，いわゆる「不良品」が多い。



### (3) 安房城跡について

- ・ 「種子島家譜」の記述からこの地に山城があり、禰寝氏が拠点としていた可能性がある。
- ・ 「楠川城」などが活躍する屋久島の「戦国動乱期」は16世紀中ごろであるが、出土遺物の年代は12世紀後半～13世紀初頭で300年以上のずれがある。  
→山城としての遺物ではない。
- ・ 土師器が少なく現時点では「生活の場」としての機能は想定しづらい  
→南東交易の拠点の可能性
- ・ 今回の調査地は遺跡のごく一部であり、全容解明のためには、さらなる調査が必要である。

